

千葉県 の 土 偶

堀 越 正 行

1. 地形と縄文遺跡の特色
2. 千葉県の土偶110年
3. 時期別概要
4. ま と め

1. 地形と縄文遺跡の特色

千葉県の地形は、北部の下総台地と、南部の房総丘陵とに大きく2分される。房総丘陵の面積は、千葉県全体の面積5,146km²の約29%を占めるが、丘陵・山地の占める割合の全国平均である75%をはるかに下回っている。しかも最高峰の愛宕山は405mしかなく、低い丘陵が襲をなして海から聳えている。北部の台地は、概ね標高20～40mの洪積台地で、県域の33%を占めている。これは全国平均の3倍近くに達している。また低地・湖沼の占有面積は約38%で、これも全国平均の約3倍である。山や丘陵が少なく、あくまでも低く、そして平らなのが千葉県の地形的特色である。

現在の千葉県は、東が太平洋、南西が東京湾に面し、海岸線は約488kmで日本列島の約1.7%を占めている。しかし、縄文海進最盛期には、東京湾は更に北に広がって奥東京湾となり、下総台地西部は海に面していた。一方、鹿島灘方面の海進によって霞ヶ浦を中心に古鬼怒湾が生成し、下総台地北部の過半も海に面し、印旛沼や手賀沼も鹹水となった。海進最盛期の千葉は、その四方のほとんどを海で囲まれた、陸けい島のような状況であったのである。縄文時代の千葉は、丘陵と台地とがほぼ半分ずつの面積であったといえる。やがて海岸線が後退し、湖沼・低地を増加させていったが、千葉県で多数発見されている丸木舟は、重要な交通手段として、生業や流通など生活万般にわたり不可欠な役割を果たしていたことが想定できる。

千葉県における縄文時代の遺跡は、常に台地・干潟の卓越する北半の下総台地側に多く、丘陵・岩礁の卓越する南半の房総丘陵側には少ない点で一貫している。両者は面積ではほぼ半分であるから、台地側の人口密度は丘陵側よりもはるかに高い状態で推移したことになる。

早期の撚糸文期、条痕文期、前期の黒浜期、中期の阿玉台期、加曽利E期、後期の堀之内期、加曽利B期の遺跡が多く、それに比べて草創期、前期初頭、前期末～中期初頭、晩期の遺跡は少ない。早期撚糸文期は、富里町など印旛・山武地域、続く沈線文期はやや北に寄り、佐原市など

香取地域に遺跡分布の中心がある。共に北総の分水嶺地域の谷頭型遺跡が多い点で共通する。条痕文期になると、海進に呼応してか、海に近い位置にまで拡散する傾向がある。前期の黒浜期は、奥東京湾側の東葛地域に集中する傾向をみせる。中期の阿玉台期と加曾利E期は、東葛・印旛・千葉・香取地域の密度が濃く、後期の堀之内期は東京湾側に遺跡が多いが、加曾利B期になると印旛地域の方が多くなり、安行期に続いていく。これら遺跡の中には貝塚を形成するものも多く、早期前葉から晩期末まで存在しているが、中期と後期の貝塚が多い。貝塚の総数は約480箇所であり、全国の約28%、県別では第1位を占めている。土偶の多寡と貝塚遺跡の多寡は全く一致しない。土偶は、千葉県においても、海・漁撈活動というキーワードと関連しない存在であることを指摘しておきたい。

2. 千葉県の土偶110年

千葉県で初めて有識者の知見にのぼった土偶は、1881(明治14)年のことで、現在の千葉市平山町台畑貝塚と大金沢町六通貝塚の土偶であった。この情報は、早くも活字となって同年末に紹介されたのである。⁽¹⁾モース氏による東京・大森貝塚の発見と発掘は1877(明治10)年、同英文・和文報告書の刊行は共に1879(明治12)年、飯島魁・佐々木忠次郎氏による茨城・陸平貝塚の発見と発掘は1879年、概報は1880年、本報告の刊行は1882(明治15)年であるから、この千葉の報告も、近代日本考古学生成期の業績の1つとして銘記されよう。しかも大森・陸平の両貝塚共に土偶は得られなかったのであるから、千葉のこの土偶は、明治になって初めて発見・報告された土偶だったといえる。明治年間後半において「貝塚土偶」という呼称が採用されたが、1885(明治18)年に東京・池袋西貝塚(池袋氷川社裏の貝塚)で白井光太郎氏が採集し、翌年報告した土偶などと共に、当時、千葉など各地の貝塚から土偶の発見が相次いだことから、「埴輪土偶」に対して別称したことに由来するものであるらしい。しかし、これら創成期土偶の多くは、その後の良好な状態の土偶の発見によって、次第に表舞台から消えていったのである。そうした中で土偶が一時脚光を浴びたことがあった。それは、明治年間後半のコロボックル説とアイヌ説の論争の風俗的傍証資料として、髻や黥(入墨)の表現が土偶に有りや無しやが大いに注目されたからであり、土偶の顔を得ることが貝塚発掘の重要な成果の1つとみられていたらしい。

1959(昭和34)年の江坂輝弥氏作成になる「県別土偶発見数および土偶・岩偶出土主要遺跡略図」²⁾では、千葉県の土偶発見数は101—199点のランクに図示されていた。ちなみに200点以上の県は、青森・岩手・宮城・茨城の4県であり、千葉県はそれらに続く比較的土偶の多い県として位置づけられたのである。当時までの千葉県内の土偶を比較的多く出土していた遺跡としては、銚子市余山貝塚、佐倉市江原台貝塚、やや少なく千葉市加曾利貝塚であった。

1960年代以降の高度経済成長を背景とする開発の波が、首都圏の一角をなす千葉県にも押し寄せ、大規模な発掘調査が各地で実施されていった。それまでの大学研究室や市町村史編さんに伴

う小規模な調査が、多くの場合、1回で1桁の数の土偶しか得られなかったのに比し、2桁や3桁の数の土偶が得られるという驚異的な数量の増加を齎したのである。佐倉市吉見台遺跡では133点以上、市原市西広貝塚でも140点以上の土偶が出土している。

そうした最中、ちょうど千葉県で土偶が発見されて100年後の1980（昭和55）年、市立市川博物館（現・市立市川考古博物館）で、「千葉県の土偶展」が開催され、49遺跡572点の土偶が展示され、追加分を含め126遺跡1102点の土偶の地名表と文献目録が作成された。これによって千葉県(3)の土偶の概要を知る手懸りが得られるようになったのであるが、個々の土偶の戸籍簿づくりは、さらに後刻を待たねばならなかったのであった。

3. 時期別概要

(1) 早期

縄文時代早期の土偶は、原田昌幸氏(4)の集成によると、全国で22遺跡45点（未報告を含めると25遺跡48点）が出土しており、うち千葉県が13遺跡22点（同じく14遺跡23点）と約半数を占めている。出土地は、成田市1遺跡7点、大栄町3遺跡5点、佐原市1遺跡2点、富里町2遺跡2点、芝山町1遺跡1点、八街町1遺跡1点、酒々井町1遺跡1点、沼南町1遺跡1点、船橋市1遺跡1点、千葉市1遺跡1点、下総町1遺跡1点であり、印旛・香取地域に集中する。

これらの土偶は、撚糸文期後半の夏島・稲荷台・花輪台期から沈線文期初頭の三戸期まで、時間的・空間的に連続しており、系統も辿れると考えられている。(5)原田氏は、これを

夏島・稲荷台期——木の根タイプ——逆三角形板状土偶

花輪台期——花輪台タイプ——ヴァイオリン形板状土偶

三戸期——庚塚タイプ——大形化したヴァイオリン形板状土偶

と整理した。(6)文様施文、それも土器の文様と一致した施文がみられるのは、三戸期の土偶が最初のものである。

出現期の土偶を、原田氏は木の根タイプとして逆三角形で単独使用したものとするのに対し、宮重行・篠原正(7)の両氏は、刺突ないし穿孔を有する土偶の観察から、逆三角形の胴部と三角形の脚部を細い棒状のもので結合し、篠原氏は更に胴部と頭部をも組み合わせて使用したと解釈している。出現期当初の土偶が、単独土偶か組み合せ土偶かの当否は保留するにしろ、撚糸文期の土偶は、「『壊されている』状況として強調し得ない点」(8)に最大の特色がある。続く沈線文期になって「それ以降の縄文土偶に普遍的な〈土偶=毀たれるもの〉という機能が確立したのかもしれない」(9)と考えられている。

出現期土偶の印旛・香取地域という北総内陸部における集中は、当時の遺跡の集中に比例している。この一致は偶然ではなく、有機的な関係が存在しよう。すなわち、人口の集中は、情報・伝達を早め、また文化エネルギーの蓄積を生む。土偶の出現と集中は、この文化エネルギー

一の発現形態の1つであったと考えられる。同じ燃糸文期遺跡の集中域の1つである多摩丘陵北部に土偶が存在しないのは、本地域と文化が異なるからであろう。しかし、北総の地において続いた土偶の系統の変遷は、現在までの知見では、沈線文期後半以降しばらくの間断絶する。果たして土偶製作の契機が何であり、どのような理由で拡散・継起し、そして土偶の一旦の終焉に至った事情は何であったのか、また土偶の機能が後の土偶と同じであったのか否か、残された問題は解明された以上に大きいといわねばならない。

(2) 前期

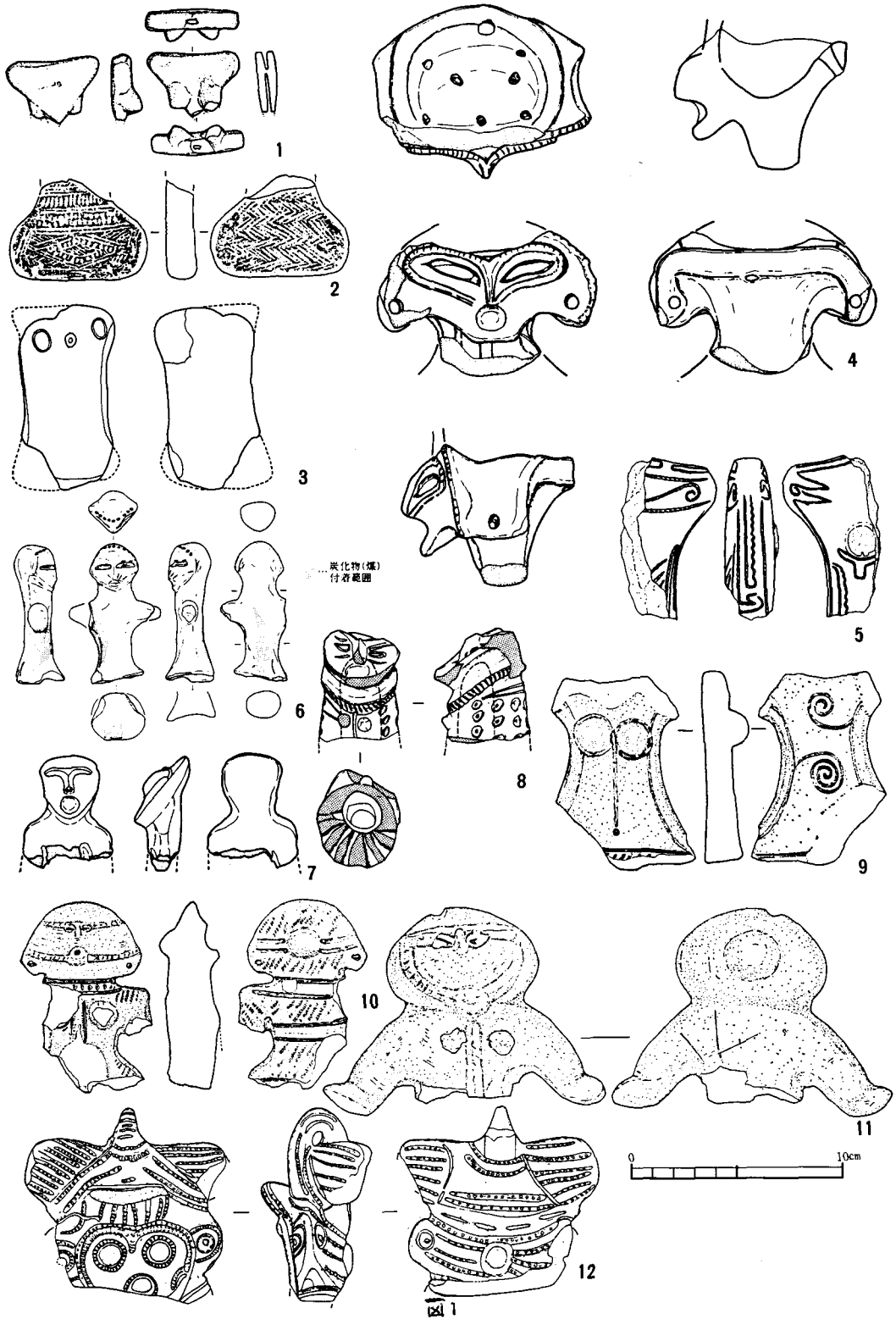
千葉県では、前期に属す確実な土偶は未だ存在していない。僅かに、白井町一本桜遺跡、千葉市高台向遺跡で、土偶とするには少し躊躇される土製品が、諸状況から縄文前期の可能性の高い例として各1点出土しているにすぎない。一本桜例は、長さ8.6cm、幅4.3cmの四隅が少し突き出た長方形を呈すもので、上方の左右に径1cmの浅い窪み、その中間やや下方に径6mm、深さ4mmのやや深い窪みをもっている。裏面は剝離して旧状は不明であるが、既存で2.5cmの厚さがあり、かなり厚味のある、かつ丸味をもったものであったらしい。付近からは繊維土器の出土が多いと報告されているが、本例自体の繊維含有については記載はない。高台向例は、ボタン形に膨れた突起状の土製品で、繊維を含有し、黒浜式土器の胎土と共通するとされている。遺存部位が僅少で決め手を欠くと記述されている通りの例である。いずれにせよ、これらが果たして土偶なのか、類例の増加を待って系統的に理解していく必要がある。これらが前期の土偶としても、千葉ではほとんど無に近い存在であったといっていいただろう。

(3) 中期

前葉の五領ヶ台期⁽¹⁰⁾の土偶の存在は未だ不明である。

中葉の阿玉台期になると、俄に土偶の存在が知られるようになる。そのうち主流をなすのは土器と共通の結節沈線文という文様を有する土偶で、厚揚のような厚味をもった無脚の板状土偶であるらしい。為に幅広の底面で立たせることが容易である。手部は少し突出する程度で、乳房と腹部(?)の貼付を原則とするようである。松戸市子和清水貝塚、根之神台遺跡、柏市聖人塚遺跡、中山新田遺跡、我孫子市新木東台遺跡、小見川町木之内明神貝塚、白井大宮台貝塚で出土している。いずれも小破片で、顔面部はまだ得られていないため、どのような顔つきになるのか不明である。これら千葉県北部の土偶は、北接して分布する茨城県南部の土偶と共に、阿玉台文化圏の土偶として位置づけられる。

阿玉台期には、少数ながら別タイプの土偶が何種か加わっている。1つは沼南町布瀬貝塚から出土している有文土偶である。形とつくりがやや粗略と表現しうる十字形板状土偶で、頭部と左腕を欠くが、脚は最初から無かったと考えられている。長さ12.4cm、現最大厚2.8cmである。胴部は細い複雑な篋書沈線で文様が描かれているが、抽象に過ぎて作者の説明がなければ理解し



1 木の根遺跡 2 庚塚遺跡 3 一本桜遺跡 4 水砂遺跡 5 聖人塚遺跡 6 尾畑台遺跡
7 伊篠白畑遺跡 8 小金沢貝塚 9~11 貝の花貝塚 12 吉見台遺跡

難いものである。次には小見川町白井大宮台貝塚（雷貝塚）で出土している無文薄板状土偶の胴部がある。同期の有文土偶より写実性を帯びた形状を呈している。茨城県では有脚の有文厚板状土偶が出土しているが、本例も有脚であったと考えられる痕跡を有す。この他、柏市水砂遺跡からは、頭頂部が窪み、かつ刺突をもつ河童形土偶の頭部1点、松戸市貝の花貝塚でも横に薄板状に伸びた腕部の先端に刻みを入れた出尻土偶の手に比定すべき土偶片1点が出土している。東葛地域という県西部は、後二者の如き中部山岳系土偶の波及をみるような、西の玄関口であったのである。このような異なるタイプの土偶が、阿玉台文化圏に存在したようなことは、千葉ではかつてない状況であった。

後葉の加曽利E期は、それまでの阿玉台期の土偶とは別系列の土偶に変わるが、阿玉台期以上に具体例に乏しい。松戸市中峠貝塚、市川市向台貝塚、千葉市園生貝塚、袖ヶ浦市尾畑台遺跡の計4点の他、栄町麻生広ノ台遺跡でも出土しているという。かつては皆無に近かった存在であったが、僅かずつであるが例は増えている。中峠・向台例は板状小形、園生例は羊かん状でこの3例は胴部に沈線文様をもつが、尾畑台例は筒状で胴部は無文である。中峠例は表採、尾畑台例は単独出土であったが、向台例は加曽利EⅡ期の貝層中、園生例は中期末の住居址覆土中からの出土である。これら加曽利E期の土偶は、直接的には東京・神奈川など関東地方南西部の土偶の系統に属すが、それ自体ヴァラエティーをもっている。とりわけ園生例は、微隆起帯という土器と共通の文様をもつ中期最終末の土偶として注目されよう。

以上のように、千葉県における中期土偶は、阿玉台期の有文厚板状土偶に自主性を認めねばならないものの、全体として主体的な土偶の使用というには程遠く、客体的、散発的な存在に止まるものであったということができよう。

(4) 後 期

初頭の称名寺期に確実に伴う土偶の存在は、まだ知られていないようである。再び土偶の空白期を迎えたというのが現在までの知見である。

前葉の堀之内期になると、ハート形土偶、筒形土偶、板状土偶の⁽¹¹⁾3者の存在が知られる。ハート形土偶は、酒々井町伊篠白幡遺跡で6点出土しているのを始め、未報告分を併せ、11遺跡18点以上と最も多い存在である。筒形土偶は、同じく伊篠白幡遺跡の4点ほか未掘出分を併せ、7遺跡以上11点が出土している。板状土偶は、松戸市貝の花貝塚で3点出土している。うち1点は胴部を概ね縦方向と横方向に貫通する小孔をもつ土偶である。青森県や福島県のような肩から腋下への貫通孔を有する土偶とは、その穿孔部位を著しく異にするが、関連を考慮すべきであろう。また、市川市権現原貝塚や曾谷貝塚で出土している、無文で断面円形のカーブする腕部とみられる土偶片も本期に帰属すると考えられるが、その形状はポーズ形土偶の一部と考えられないこともないが、他部位の出土例がないことから、ハート形土偶の手のヴァラエティーと考えるべきかもしれない。今後の課題である。筒形土偶は、君津市・市原市・千葉市・酒々井町・栄町とい

う、内房線～総武・成田線に沿った分布を示しているが、ハート形土偶は、市原市・千葉市・酒々井町で筒形土偶の分布と重なるが、市川市・鎌ヶ谷市・松戸市・沼南町といった県西部の東葛地域では重ならないのが分布の現状である。両者の共存は、酒々井町伊篠白畑遺跡のみであるが、もともと1点出土例が多いことからすれば、何ともいえない。松戸市貝の花貝塚では、ハート形土偶と板状土偶が出土している。土偶タイプの差が何を反映しているのか、興味あるところであるが、堀之内期に至り、東日本、とりわけ関東の土偶文化圏の中に千葉も組み込まれていったことは注意されよう。伊篠白畑遺跡の10点の土偶の出土は、千葉県ではそれより前にはなかったことであり、以後の山形土偶以下の多出の先駆をなす方といえよう。

中葉の加曾利B期は、山形土偶の世界である。千葉県北部の下総台地は、北に隣接する茨城県と共に山形土偶を多く出土する中心地を形成しており、土偶の使用が普遍的となる点が指摘できる。千葉市加曾利貝塚、佐倉市吉見台遺跡、四街道市千代田遺跡など、20点を超える山形土偶を出土する遺跡も出てくる。その多くが、瓦吹堅氏の分類⁽¹²⁾でいう第Ⅱ～第Ⅲ段階に比定できそうである。そこで問題となるのが千葉市加曾利南貝塚で2個体分の堀之内2式の正位埋設土器の覆土中から検出された土偶頭部1点の処遇⁽¹³⁾である。この事実を以って調査者野口義磨氏は、山形土偶は堀之内式の後半の時期に出現しはじめる⁽¹²⁾と報告したのであるが、土偶それ自体は、瓦吹編年の第Ⅰ段階に比定できそうもない要素もっている。土偶が土器との関連で出土することは稀有で、貴重な例であるにもかかわらず、この加曾利貝塚の土器と土偶とを結びつけることは、型式論的にはかなり無理があることになる。とすれば、土偶頭部が混入した状況を考えなければならないが、果たしてそのようなことがありえたのか、解決は尚も将来に持ち越されよう。

後葉の安行期、とりわけ安行2期は、木菟形土偶によって代表される。山形土偶と共に板状であり、山形土偶から木菟形土偶への移行期に製作されたと推定される異形の土偶も散見される。それらは安行1期の土偶となるものであるらしい。刺突文は古い段階の土偶に多く、太沈線文は新しい段階の土偶に盛行する。また耳部は、古い土偶は穿孔例が多く、完成した木菟形土偶は円形貼付文となる。後期の木菟形土偶は、銚子市余山貝塚で多く出土している。その中に1点、頬に刺突をもつ有髯土偶の中空頭部がある。後頭部は太くて浅い彫刻的な沈線によって対向重弧文が施文され、交点に貼瘤⁽¹⁴⁾、頭頂部に角状突起をもっている。その文様から東北地方からもたらされたものではないかと考えられており、青森県弘前市船ヶ沢遺跡に近似例がある。本土偶が千葉県における中空土偶の初出である。

(5) 晩期

前葉の安行3 a・3 b期は、木菟形土偶が引き続き製作される。県内では中実土偶のみで、中空土偶はないらしい。文様としては、入組文や三叉文など土器の文様を採り入れた土偶が目立ち、形態的には脚部が次第に簡略化していく。木菟形土偶は、安行3 c期まで続くことが鈴木正博氏⁽¹⁵⁾により明らかにされたが、県内での出土例はまだなく、安行3 b期で木菟形土偶の系譜は途絶え



図2

1 富士見台遺跡 2・5～7 吉見台遺跡 3 野原台遺跡
4・9 貝の花貝塚 8 池花南遺跡 10 武士遺跡

るらしい。また、千葉の晩期前葉の土偶は、木菟形土偶の系列のみで、これ以外の系列の土偶の存在は、今のところ確認されていない。

中葉の安行3c・3d期になると、東北・北関東系土偶の影響を受け、それまで続いた木菟形土偶系列とは全く異なる土偶が製作されるようになる。市原市西広貝塚、佐倉市吉見台遺跡が代表的な遺跡であり、その数は数十～百点を超えるという空前絶後の数であり、1遺跡における土偶の使用が最高となる。横芝町山武姥山貝塚では、部厚い造りではあるが、中空の遮光器土偶の顔部が出土しており、松戸市貝の花貝塚、大多喜町堀之内上の台遺跡、横芝町山武姥山貝塚、佐倉市吉見台遺跡などでも中空土偶が存在し、なかでも吉見台遺跡では目立ち出土している。この中空土偶は大形化する傾向がある。他方、市原市西広貝塚のように中実土偶が大多数の遺跡もあるが、中実土偶の多くは、概して中空土偶よりも小形である。胴部は板状ないし角柱状を呈し、肩や腰に隆帯装飾をもつ土偶も多い。胴長短足傾向が著しく、脚部はO脚状を呈すものが多い。一部に櫃原土偶に似た形状の土偶もある。土版との接近が認められるのもこの段階の特色といえよう。頬、口の周囲、顎などの顔面部に沈線を入れるのも、この段階の土偶によくみる手法であり、次の晩期後葉に盛行するいわゆる黥面土偶の先駆をなしている。杉山寿栄男氏旧蔵の佐倉市江原台遺跡出土の土偶2点と辰馬資料館蔵の本埜村龍腹寺遺跡出土の土偶1点は、古くから知られた本段階土偶の優品であり、亀ヶ岡様式の影響のもとに作られた土着的土偶と考えられている。成田市荒海貝塚の胸部にV字形の区画帯のある土偶は、中でも大洞C₂式の亀ヶ岡様式土偶の規範に則ろうとした意図の窺える模倣土偶として知られている⁽¹⁶⁾。この晩期中葉は、千葉県の土偶が最も多様に展開した時期であるといえよう。

後葉の千網・荒海期は、市原市西広貝塚、千葉市子和清水遺跡、成田市荒海貝塚、四街道市池花遺跡のように、黥面土偶がみられる。松戸市貝の花貝塚の帽子をかぶった顔の土偶も、この段階に比定できよう。このように、縄文時代晩期終末に至っても土偶は存続するが、その量は少量にとどまるようである。また、市原市武士遺跡では、弥生時代の須和田期の竅穴住居跡の覆土から、中空土偶の腕部が須和田式土器片と共に検出されている。土偶の時期については現在検討中とのことであるが、注目される資料である。

4. ま と め

早期は、北総地域の調査の進展に伴って、撚糸文期を中心に土偶の検出が相次ぎ、日本列島における出現期土偶の最初の集中域となっている。かつて鶴崎貝塚や茨城県花輪台貝塚出土の土偶の存在が知られていた頃、土偶の出現は貝塚の出現と軌を一にする文化発展の1要素かともみられていたが、出現期土偶の集中域は、北総の各水系の谷奥部の分水嶺周辺であり、同時にそこは撚糸文期の遺跡の集中域であることが判明した。出現期土偶は、むしろこの内陸部の遺跡の集中に対応した、文化エネルギーの発現形態の1つとして存在していたものと考えられよう。この内

陸部の遺跡の集中は先土器時代以来の立地の踏襲であり、早期中葉の沈線文期まで一応続くが、後葉の貝殻条痕文期になると、沿岸部への遺跡の拡散が顕著となるのに対応するかのようになり、千葉の土偶は一旦消滅する。海との係わりをもった生活で土偶が出現した訳ではないことは間違いないところである。

早期後葉の茅山期から前期においては、貝塚が県内各地で形成されていくが、土偶は、海との係わりをもった生活と無関係であるかのように、不確実な2例が内陸の遺跡に存在するにすぎない。この土偶とはほとんど係わらない生活は、中期初頭まで続く。

中期中葉の阿玉台期になると、再び土偶が出現する。中期の土偶は、阿玉台・勝坂期、加曽利E期共に出土例が近時倍加しているが、基本的には土偶希薄地域といえる。千葉県北部は茨城県、西部は東京都・神奈川県以西地域の土偶との関連をもっているが、阿玉台文化の土偶以外は、周縁的分布を形成するに止まる。その受け入れは単発的であるといえよう。阿玉台文化の土偶は千葉県北部に分布するが、北の茨城県南部と共に東関東の阿玉台土偶の主体的分布圏を形成している。しかし、土偶の使用は盛んとはいえず、西の玄関である東葛地方では、勝坂文化の土偶が僅かながら波及しているのが注目される。阿玉台土偶と勝坂土偶との共伴例はまだないが、土偶祭祀の熱心さの違いが、土偶の波及力の差となったものと考えられることもできよう。中期後葉の加曽利E期は、遺跡や住居数の激増にもかかわらず、僅かな土偶しか存在しないのも、貝塚と土偶存在との無関係性を明証していよう。加曽利E土偶は、直接的には関東地方南西部の土偶の系統に属す。それは、いわば西の加曽利E文化の土偶であり、東の加曽利E文化の土偶はなかったといえよう。但し、中期末の園生貝塚例は、これら加曽利E2期までの土偶とは別の問題をもつ可能性を含んでいるように思われる。中期末から後期初頭の土偶は従来皆無であったが、中期末に1例付加されたことは注目されよう。しかし、称名寺期を含めた該期遺跡の多数の発掘例にもかかわらず土偶が出土しないのは、基本的には土偶を使用しない生活を堅持していたことに由来するのであろう。

千葉県の土偶の圧倒的多数は、後・晩期に属す。前葉の堀之内期の土偶も検出例が増え、ハート形土偶、筒形土偶、板状土偶の少なくとも3者が併存し、特定タイプに偏らない。この土偶タイプの差が、集団の結びつきの系列の違いによるものか、それとも土偶祭祀内容の違いを意味するものかは、なおも今後に残された重要な課題であるが、東日本の土偶文化圏の中に組みこまれた事実の意味する所は大きい。中葉の加曽利B期に至って、茨城県と共に千葉県は山形土偶の主体的分布圏を形成し、千葉で土偶が普及したといえるようになり、以後、晩期中葉まで土偶は盛用されていく。山形土偶から後葉の安行期の木菟形土偶への変貌は、千葉を含む東関東で迎えられる可能性が大きいように思われる。木菟形土偶は、後期後葉から晩期前葉まで系統的变化を遂げていく。その間の異系統土偶の存在は未だ僅かであるが、銚子市余山貝塚の中空の有髻土偶頭部のように、東北地方との交流が土偶においても認められることは明記されよう。

晩期中葉になると、木菟形土偶は破棄され、東北・北関東系土偶の影響を受けた多様な土偶が

製作される。未だ総称名はないが、大・小、中空・中実、板状・柱状など多様な土偶が数十、数百も製作、使用された遺跡も出現する。土偶祭祀が個々の集落で実施されていたとすれば、土偶出土量の差は、使用頻度の差となるが、周辺の複数集落を巻き込んでいたとすれば、共同祭祀が執行されていた拠点集落となる。果たして、土偶祭祀がどのように執行されていたのかは、今後の当該期遺跡の比較検討によって解明されるであろう。また、土偶の大小、精粗、あるいはタイプの別に、どのような区分原理が働いていたかの追求も必要である。晩期末葉の土偶は黥面土偶を代表とするが、僅かな存在となってしまう。

以上、千葉県における縄文土偶の在り方をみてきたが、まだ土中に埋もれている土偶は論外として、古い採集によって所在が現在不明となってしまった土偶、個人蔵で未だ公表されていない土偶、発掘されてはいるが未だ報告されていない土偶、報告・紹介はあるが脱漏となってしまった土偶など、データ入力されていない土偶もまだ多く存在しているであろう。これらの土偶のデータ化とそれを踏まえた土偶分析の多角的な深化とが今後共必要であろう。

註

- (1) 加部敏夫 1881 「古器物見聞の記」『好古雑誌』初編第6号。堀越正行 1981 「所謂「平山村土偶」の検討」『史館』第13号, 56~66, 史館同人。
- (2) サントリー美術館 1969 『土偶と土面』125による。この本の図は、野口義磨 1959 『日本の土偶』紀伊国屋書店 に江坂輝弥氏が作成・提供した図の再録であるらしい。しかし、江坂輝弥 1960 『土偶』校倉書房 附録の分布図は、千葉県は50以上(~99まで)のランクに図示されている。
- (3) 堀越正行 1980 『千葉県の土偶 付・千葉県土偶出土遺跡地名表・文献目録』市立市川博物館
- (4) 原田昌幸 1987 『発生期の土偶について 縄文時代早前期の土偶集成基礎資料』
- (5) 原田昌幸 1987 「縄文時代早期の土偶—発生期の土偶をめぐって—」『考古学ジャーナル』第272号, 4~7, ニューサイエンス社。
- (6) 印旛郡酒々井町猿楽場遺跡では、井草式土器出土範囲から、欠損しているが剣菱形に近い扁平な土製品が発見されている。これが確実に井草期の土偶であるならば、最古の土偶となるが、今少しの類例の増加を待ちたい。篠原正ほか 1985 『北大堀・猿楽場遺跡発掘調査報告書』財団法人印旛都市文化財センター発掘調査報告書, 第1集 酒々井町。
- (7) 宮 重行 1984 「No.6遺跡(新東京国際空港内)の燃糸文期の資料」『研究連絡誌』第9号, 12~18, 財団法人千葉県文化財センター。
篠原 正 1986 「金堀遺跡出土の土偶に関する一考察—縄文時代草創期後半の土器と土偶—」『研究紀要』1, 1~42, 財団法人印旛都市文化財センター。
- (8) 鈴木正博 1990 「縄文式遺蹟系列に於ける階層的網状組織と高井東遺蹟の土偶」『土曜考古』第15号, 1~10, 土曜考古学研究会。
- (9) 註5)と同じ。
- (10) 小見川町白井大宮台(雷)貝塚出土例を、註4)文献で五領ヶ台式土器に伴って出土したと記してしまった。しかし、報告書、西村正衛 1954 「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚(第二・三次調査)」『学術研究』第3号, 135~161, 早稲田大学教育学部では、「阿玉台式の土器と共に発見された」とあり、訂正しておく。
- (11) 植木 弘 1990 「土偶の形式と系統について—東日本の後期前半における三形式の土偶をめぐって—」『埼玉考古』第27号, 27~76, 埼玉考古学会 の分類による。
- (12) 互吹 堅 1989 『山形土偶について』第6回「土偶とその情報」研究会資料。
互吹 堅 1990 「山形土偶」『季刊考古学』第30号, 32~35, 雄山閣, の分類による。
- (13) 野口義磨 1968 「加曾利南貝塚の土偶および土製品」『加曾利貝塚Ⅱ—昭和39年度加曾利南貝塚調査報告書一』貝塚博物館調査資料, 第2集, 178~188, 千葉市加曾利貝塚博物館。

- (14) 野口義磨 1961 「千葉県余山貝塚の二つの土偶」『MUSEUM』第121号, 7~12, 東京国立博物館。
- (15) 鈴木正博 1989 「安行式土偶研究の基礎」『古代』第87号, 49~95, 早稲田大学考古学会
- (16) 永峯光一 1977 「呪的形象としての土偶」『土偶 埴輪』日本原始美術大系3, 155~171, 講談社。

図版出典文献

- 図1-1 木の根遺跡 『木の根』千葉県文化財センター 1981年 199頁 第136図 No.6遺跡土偶, 土製品 6
- 図1-2 庚塚遺跡 『東関東自動車埋蔵文化財調査報告書Ⅲ一大栄地区(2)一』千葉県文化財センター 1987年 38頁 第24図ミニチュア土器・土製品実測図 7
- 図1-3 一本桜遺跡 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』千葉県都市公社 1974年 122頁 4-21図 CN403地点出土の土製品 X91 1001
- 図1-4 水砂遺跡 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ一館林, 水砂, 花前Ⅱ一1一』千葉県文化財センター 1982年 177頁 第121図特殊土製品
- 図1-5 聖人塚遺跡 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ一元割, 聖人塚, 中山新田Ⅰ一』千葉県文化財センター 1986年 264頁 第205図特殊な土器土製品 5
- 図1-6 尾畑台遺跡 山本哲也「君津地方出土の土偶」『君津都市文化財センター紀要Ⅲ』君津都市文化財センター 1989年 5頁 第4図尾畑台遺跡出土土偶
- 図1-7 伊篠白畑遺跡 『酒々井町伊篠白畑遺跡』千葉県文化財センター 1986年 314頁 第203図土偶実測図 1
- 図1-8 小金沢貝塚 『千葉東南部ニュータウン10-小金沢貝塚一』千葉県文化財センター 1982年 123頁 第103図貝層出土遺物(土製品) 7
- 図1-9 貝の花貝塚 『貝の花貝塚』松戸市教育委員会 1983年 431頁 第242図土偶実測図 17
- 図1-10 貝の花貝塚 『貝の花貝塚』松戸市教育委員会 1983年 434頁 第245図土偶実測図 43
- 図1-11 貝の花貝塚 『貝の花貝塚』松戸市教育委員会 1983年 430頁 第241図土偶実測図 4
- 図1-12 吉見台遺跡 『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ』佐倉市教育委員会 1983年 166頁 第68図土偶(3) 16
- 図2-1 富士見台遺跡 山本哲也「君津地方出土の土偶」『君津都市文化財センター紀要Ⅲ』君津都市文化財センター 1989年 9頁 第9図富士見台遺跡出土土偶 1
- 図2-2 吉見台遺跡 『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ』佐倉市教育委員会 1983年 166頁 第68図土偶(3) 18
- 図2-3 野原台遺跡 内野美三夫「眼を省略した土偶」『史館』第2号 史館同人 1974年 87頁 第1図
- 図2-4 貝の花貝塚 『貝の花貝塚』松戸市教育委員会 1983年 431頁 第242図土偶実測図 11
- 図2-5 吉見台遺跡 『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ』佐倉市教育委員会 1983年 167頁 第69図土偶(4) 22
- 図2-6 吉見台遺跡 『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ』佐倉市教育委員会 1983年 167頁 第69図土偶(4) 25
- 図2-7 吉見台遺跡 『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ』佐倉市教育委員会 1983年 176頁 第76図土偶(11) 89
- 図2-8 池花南遺跡 『千葉県文化財センター年報』No.12 千葉県文化財センター 1986年 19頁 図6 池花南遺跡出土有髻土偶
- 図2-9 貝の花貝塚 『貝の花貝塚』松戸市教育委員会 1983年 430頁 第241図土偶実測図 5
- 図2-10 武士遺跡 『千葉県文化財センター年報』No.13 千葉県文化財センター 1987年 18頁 須和田期の住居跡と土偶

(市立市川考古博物館)